

## 1 荒れ狂う稲妻 飛翔する魂

①9 月 24 日。台風 15 号がわが家を直撃した。

防災警報は続々と入っていたが、雨足も弱いのでタカを括っていた。

だが、9 時 20 分、それは突然やってきた。

稲妻が光り、天地も裂けよとばかり雷鳴が響きわたる。獣のように咆哮する雷！

それが間断なしに延々と続く。もの凄いことになった。長い人生ではじめての体験の幕開けであった。

②この辺りは雷の多発地帯である。数年前に電力会社がわが家の庭先に避雷針を埋めていった。溶岩を 40 メートル掘っての大作業だった。

かつては数百メートル先で落雷があり、火事になったこともあった。

雷の怖さには慣れているつもりだったが、今回はいつもとは明らかに違う。ひっきりなしに稲妻と大音響が続く。ローカル・テレビで状況を知ろうとしたが、電波は乱れ、テレビの音もかき消えてしまう。

③雷は 10 分たっても 20 分たってもやまない。異常である。

ただひたすら待つしかないが、雷が上空に張りついて離れない。稲妻が走ったとたんに大音響が鳴り渡る。その繰り返しである。

こんな大音量に曝露<sup>ばくろ</sup>され続けたら、精神にもよくない。いつもの通りすぐ終わると思っていたのに、嵐が永遠に続くような不安にとらわれる。

④だが、さすがに 30 分たっても収まる気配がないと、緊張感が薄れた。

落雷に備えて警戒態勢をとっているが、何もできないし、やることもない。やりかけの仕事をしようとしても、集中できない。所在ない。

⑤ふと喜多郎の『The Light of the Spirit』（「魂の輝き」）を思い出した。タブレット端末には好きなクラシックを入れてあるので、こんな時に役に立つ。

ニューミュージックの旗手と呼ばれた喜多郎は、「孤独の瞑想者」の趣がある。わたしはリリースされた当時から 30 年以上もこの曲を偏愛している。曲の高揚と鎮静のくり返しが、

たまらなく心地よい。7番と8番をくり返しかけて、嵐が止むのを待った。

⑥「こんな時に・・・」と、妻はあきれていたが、ここに至ってはすることもない。雷と喜多郎のコラボも一興である。

7番の“Howling Thunder”（「咆哮する雷」）は、精神が高揚するのに心は落ち着く不思議な調べである。

雲間から一条の光が射して、天への<sup>きざし</sup>階段を映し出す。現実という<sup>くびき</sup>頸木から解放され、わが魂は天に向かって昇っていく。高揚感と陶酔感が交互にやってくる。

こんな風にして40分がたった。雷の音はしだいに遠くなり、稲妻もやんだ。やれやれ・・・。

⑦と思ったのもほんのひと時で、すぐにショーの第二幕が始まった。

今度は第一幕とは違い、稲妻が走ってしばらくしてから雷鳴がするから、雷は遠ざかっているに違いない。

こうなると8番のJourney to a Fantasy（「平安への道」）の出番である。

それは、嵐の後にやってくる心の平安を暗示しているようである。

8番をくり返し聞くうちに、心は晴れやかになる。やがて雷は遠のき雷鳴も消えた。

⑧第二幕も40分ほど続いた。

第一幕と二幕を合わせ、1時間20分の長丁場はこうして幕を閉じた。

台風は温帯低気圧になり、また静かな時が戻った。

\*『The Light of the Spirit』のタイトル/見出しは英文で、括弧内の和訳はわたしの仮訳である。

## 2 「<sup>こくしょこっかん</sup>酷暑 酷寒の時代」がやってきた

①台風から2ヶ月が過ぎた。このところ小春日和が続く。ついあの時の衝撃を忘れそうになる。来年は昔の平穏な気候に戻るのではないか。

だが、よくよく考えてみれば安心してはいられない。あの雷の80分は、異常極まる事態だった。「何事もなくよかった」ではすまされない。何かが狂っている。

②日々は慌ただしく過ぎ去っていく。コロナの第八波が始まったし、5回目の接種の手続きにも時間がかかる。歯の治療もあるし、庭の工事もある。何かと気ぜわしい。

どうしても目先のことにとらわれ、来年のことまで気が回らない。  
だが、気分には迷わされず、早く手を打たなければならない。防災対策はわが家の緊急課題である。

③20 年前、夏は涼しく冬は温暖だった。

この辺りの気温は平地より 2 度ほど低いが、黒潮のおかげで冬は暖かく、寒い夜にたまに暖房を入れるくらいですんだ。

ところが、黒潮が大蛇行して数年たった今では、冬は底冷えして暖房なしではやっていけない。昼にも暖房が必要になった。気がつかなかったが、暖房費は昔の 3 倍になった。

④夏には昼も夜も冷房はまったくいらなかった。ところが 7～8 年前から劇的に変わった。昨年は 11 月になっても、ジリジリと暑かった。寝室は夜も 28 度を下らず、一晩中冷房をつけっぱなしでなくては眠れない。

今年の夏も酷暑だった。書斎は早朝からもう 28 度。慌てて冷房をいれる始末である。

⑤あまりの暑さに、たまらず電動のオーニング(日よけ)をつけたが、大枚を払った割には焼け石に水。まるでヒートランドである。こんな弥縫策では酷暑にとうてい対処できないと悟った。

これから高温化が進み、数年もすれば灼熱地獄がやってくるに違いない。「森の生活」の夢はとくに破れてしまった。

⑥かつては、水田近くの堰で「水辺の宝石」と呼ばれるカワセミが見られたのに、いつの間にか見かけなくなった。

わが家の数十メートル先の草むらで遊んでいた、鹿の親子もとんと見なくなった。

コジュケイが十数羽、庭を走りぬける光景もめっきり減った。

夏のヤマユリはたちまち枯れ、花しょうぶも元気がない。

秋の彼岸花は数日でしおれ、カラスウリも花をつけるが、昔のような勢いはない。

⑦ウグイスが秋に鳴いたり、シャクナゲが 1 年に 2 度咲いたり、おかしいことが続く。

花粉を運ぶ蝶や蜂の行動も変化しているに違いない。

気づかなかったが、気温や気候の変化のせいで、花、鳥、動物の生態系大きく狂い始めている。

⑧極めつきは3年前の台風19号の直撃だった。

豪雨と大洪水で、かつては「日本の原風景」ともてはやされた田畑も、一面の水浸しとなった。土砂崩れで山の木々は削りとられ、山肌を晒す無惨な状態が今なお続く。

わが家も瓦が浮き、大量の雨漏りで右往左往した。頑丈だった車庫も吹き飛び、<sup>がれき</sup>瓦礫と化した。

この頃から異常気象は不可逆的なステージに入ったのではないか。何とも空恐ろしい。

### 3 ラクダの背骨は折れたか？

①目を転じると、世界中で異常気象が頻発している。

数ヶ月前まで干ばつに苦しんでいたアフガニスタンでは、国土の3分の1が冠水する大洪水になった。スペイン、モロッコでも大干ばつが続く。

②40度を超える大熱波、やまぬ山林火災、火山大噴火、頻発地震、巨大台風、氷河溶解など、異常事象が引きも切らない。

海も山も砂漠も冰山も、異様な動きを見せている。天も地も猛烈な勢いできしみ始めた。

③「北京で蝶が羽ばたけば、ニューヨークで嵐が起こる」。これが「バタフライ効果」仮説の衝撃的な一例である。

北京で蝶が羽ばたくと空気わずかに動揺し、それは周りに影響を与えて小さな気流の変化を起こす。小さな気流の変化は大きな気流に影響を与え、その連鎖はめぐりめぐって、やがてニューヨークに嵐をもたらす。

目にも見えない極微の変化が、時間と空間を超え、遠隔地で巨大な影響を与える。

④この仮説の適用範囲は無限大である。

30年以上前に唱えられた地球温暖化説もその一例といえる。

二酸化炭素が増え、海面の気温が上昇し、偏西風が変わり、海流が蛇行し、巨大台風が発生し、地震や火山の噴火を誘発する。

温暖化説が発表された奇抜な理論だとして、徹底的に批判された。繊細精妙な自然の因果の流れは、当時の人々の理解を超えていた。

⑤相模湾沖の黒潮の蛇行と北極の氷山の崩壊に何かの関係があるのか。

三陸沖の大地震とアフリカの大干ばつとの間に何かの関係があるのか。  
何が原因で何がその結果なのか、またはその逆なのか、それとも何千、何万、何百万という膨大な要因が絡みあっているのか？  
それを探ろうとする複雑系の研究は、最近始まったばかりである。

⑥西欧のことわざにいう。

ラクダの背骨を折るのは最後の一本の藁である (It is the last straw that breaks the camel's back)。

重い荷物を背負える 駱駝<sup>らくだ</sup>にも必ず限界がある。負荷をかけ続ければ、最後の藁一本が駱駝の背中を折ってしまう。

⑦変異の予兆は以前からあちこちに現れていた。しかし、人間はそれに気がつかなかった。スーパーコンピューターやAIも気候変動を解明するレベルには達していない。  
今後10年、20年たっても解明は無理である。わたしは極めて悲観的である。

⑧気候変動はもう引き返せない破断点に達したのであろうか。人類はすでに最後の一线を越えてしまったのではないか。  
それは分らない。だが、明らかになったときはもう遅い。自然は壊滅的な打撃を受け、人口は激減し、都市は廃墟と化すだろう。  
人類はどこへ行くのか。気候変動が人類滅亡の序曲とならなければよいが・・・。

#### 4 「陸の孤島」の防災準備

①わが家は丘の中腹にある。  
ちょっとした雨でも、ライフラインは影響を受ける。道路はあちこちで冠水し、通行止めとなる。単線の電車も運休する。災害に弱い土地柄である。  
まして台風ともなれば、落石、土石流、土砂崩れで道路は切断され、わが家はたちまち「陸の孤島」となってしまう。少なくとも5日から7日は、孤立無援を覚悟しなければならない。  
交通が遮断され、停電になれば、たちまち生活は立ち行かなくなる。付近の家もまばらで、

頼る人もいない。

②最善の策は、台風にくる3～4日前に遠くに逃げることだろう。だが、この頃の台風は迷走するし、巨大である。東北の親類を頼っても、逃げ切れるかは疑問。かといって、台風のために遠くのホテルを探すのも簡単ではない。電車も飛行機も大混雑だろうし、土地勘もない所へ逃げるのは却って危ない。結局、遠くへ逃げるのは、「ここぞ」という巨大台風の時だけだろう。だが、いつ、どこまで逃げればよいのか。逃げるアイデアはよいが、実際には難しい。

③地元の避難所に逃げるのが安全のようだが、近くの避難所はわが家より低地にあるし、背後には山が迫って土砂崩れの危険が大きい。実際、3年前には避難所の近くで土石流が発生し、山肌はまだ痛々しい。遠くの避難所は安全なようだが、いかんせんわが家から数キロ先にある。ひとけもない丘陵の坂道を、嵐の日に車で下って行くのは危険すぎる。まして夜間の避難は論外である。

④こうして検討すると、結局、超巨大台風でない限り、わが家で巣ごもりの方が安全ということになる。早速、5日間の巣ごもりを前提に（1）防災用品（2）緊急連絡先（3）避難所リスト（4）災害情報の収集、などを見なおした。食料と水の備蓄は日ごろから十分なので、問題ないし、簡易トイレ、ヘルメット、ランプ、電池、スマホの充電キットなども一応そろっている。ただ、防災用料理用具がなかったので、炭火用のバーベキューセットを買った。

⑤災害対策というどうしても防災用品の準備に目が行きがちだが、わが家は実はもっと根本的な問題を抱えていた。停電である。電気はわが家の唯一のエネルギー源である。電気が止まったら、冷蔵庫もパソコンも使えないし、料理もできない。夏の真っ盛りに停電したら、たちまち熱中症にかかってしまう。底冷えする冬に暖房がとまったら、すぐに体調を崩してしまう。

⑥停電は以前からアキレス腱だった。数百メートル先の地区ではよく停電するが、わが家は

今まで免れていた。何となくタカを括っていたが、それは単なる幸運だっただけ。この辺りは雷の多発地帯だから、いつ停電してもおかしくない。

エアコンの効かない夏、暖房のない冬を考えるだけで恐ろしい。

⑦停電対策がサバイバルのかなめと気づき、家庭用蓄電システムを探したが、どれも帯に短したすきに長し。市販されている家庭用蓄電池は、酷暑酷寒の5日間を過ごすには全く不十分である。かといって業務用のものでは大きすぎる。

電気自動車から充電してもとても足りないし、太陽光発電を導入するのはコストがかさむ。平時には通常の電力で蓄電し、災害時に「最低限の生活レベル」を維持できる家庭用蓄電システムはなかなか見つからない。

⑧簡単に考えていたが、防災準備は穴だらけだった。いままでの対策は防災用品の備蓄に偏っていた。わが家の居住環境に即した防災対策をするには、膨大な時間と費用がかかる。

本当の対策はこれからである。気は焦るが、優先順位をつけて着実に進めていくほかはない。残された時間は少ない。